

栃木県現代俳句協会報

No. 165



第一六五号

発行所

〒331-0106
小山市扶桑二一八一〇中村方

発行人 和田浩一

編集人 松本登子

令和四年五月十日発行

支部句会作品

広報部

三月下旬に予定されていた第六十六回俳句研究会が、新型コロナウイルスの影響で中止になりました。かわりまして、各支部句会の作品をお届けします。

* 俳句会

(県南支部)

春夕焼ベンチに小さき野球帽
難聴の耳を寄せあい日向ぼこ
気負はずに平凡が良し梅の花
恙なく傘寿となりて年惜む
ふるさは東京下町春の雲
木の枝に猫眠りいる春の午後
春昼や僧の作務衣の紺深し
轍をじつとみつめる母に似て

和田浩一

青木廣子

秋元幸治

石川和子

バス停に待つ節分の鬼の面
節分の鬼が窓辺で覗きおり

宇津木玲華

猪の出没騒動大野焼

軽部榮子

街路樹も三寒四温に耐えている
着ぶかれてまた耳鳴りの音ちおり

北島洋子

着ぶかれて鴉に笑われてしまう
溶接の火花余寒の町工場

幸田慶三郎

妄想も空想もとけ雪解川
裸木はトルソーに似て風のなか

小杉栄美子

反戦歌うたい君とのオリオン座
停戦という戦時あり冬の月

小林たけし

折鶴に山谷いくつ一月尽
一縁の絆深めし年賀状

佐藤道子

婆ひとりそつなききと日春立ちぬ
五臓なきごとき幹にも梅一輪

須藤正之

胃カメラも捉えきれない春うれい
陽を背負い土の匂いの蓬摘む

高木洋子

見えぬのに追われおわれて除夜の鐘
薄氷を破りて過去を溢れさす

戸田富美子

受験子の二階は孤島朝ぼらけ
風光るいつか誰かが座る椅子

中村克子

葱きざむ以後の歳月思いつつ
初茜影うつくしき煉瓦窯

沼田 満

花八つ手喪中はがきを握り締め
逃避行めく大ぶりの春シヨール

根本菜穂子

渦となる不戦・反戦兜太の忌
地下鉄にこもる鉄の香冬深し

日向野初枝

洗ひ干す蒸器あめいろ春残し
冬近しコルクに残るワインの香

星野治子

夫婦箸ともに傷つき秋の夜
赤いケトル蓋ごとことと寒明ける

堀 秀子

約束のメモを確かめ春近し
梅の香がみるみる母に効いてきし

増山ちさ

驚悠悠あれは兜太かよし宏か

側溝の蓋がたんと寒の入り
野遊びの小さな旅の三輪車

松本幸子

故郷の話をしよう桃の花

柳 浩二

荒縄を取り替え洗う大根かな

遊座純子

一人分のコーヒーポット三日かな

横井康子

沙汰のなき子より返信冬木の芽

和田璋子

受験生リユックに詰める重さかな

和田璋子

子の名ある辞書の赤線雛の夜

石倉夏生

のひらに初雪まるめ面会日

相田勝子

ベーゴマのうねり七彩春立ちぬ

牛丸幸彦

葦焼の風に戦の暗さあり

大竹照子

春眠の中へ躰を置いて来し

北島洋子

慎太郎を偲ぶマラソン春うらら

紅梅白梅言いつの喃み合わず

風船が厨の夜に立っている
この世には逃げ場所の無し紙風船

栃木喜美子

白梅や人生あまた遅速あり

早川 激

鍵と鍵穴昼の月と紅梅

鞆の少年粋な風となる

松本廉子

紋白蝶鬱の扉を開くかに

ダ・ヴィンチの髭鬚髯や冬深し

水口圭子

春寒しウクライナの時差七時間

手繋ぎの一瞬一飛びの春泥

山野井朝香

風花やココア日和の嘉右衛門町

*二龜句会 (県西支部)

*亀の会 (宇都宮支部)

霾ぐもり習近平が立つてゐた

速水峰郎

霾や土砂にもありぬ旅ごころ

唄ふごと十を数えて花いちご

池澤光子

吾もまた敵か恋猫退かず

過ぎし日の明暗切株に冬日

鯉沼桂子

億年の地球に生れて鳥曇り

椿落つある日はプラス思考にて

増山ちさ

卒業の襟に光を遊ばせて

春雨のさめのあたりに葱畑

中村國可

春泥に滑つて転んで嶺遠し

春光に映ゆる愛車や古希の道
営業は夜八時まで朧の灯

森本金一

ロポットの如く卒業証書受く

左保姫の肢体ふはりと天翔る

水野信一



室の八島



巴波川に泳ぐ鯉

*山麓句会 (栃木支部)

海底火山噴火身近の寒鴉
まごころの大きな笑ひ金盞花
独裁者の眼と同色の猫柳
接種して体に余寒広がれり
風にも日にも形くづきぬ野のすみれ
風音のふれてゆきたる詩のことは
風の鍛へし蠟梅の香の高き

中井洋子
石倉夏生

大豆生田伴子

大竹照子



栃木市・楽遊館 (山麓句会会場)

息吸って吐いて晩年を臍にす
胸中にとび火している寒椿
ワクチン会場の出口からひばり野へ水口圭子
チエロの弦すべる指先春隣
カップ麺三分待つも春うれい
裏道を縫う恋猫もわたくしも
傾聴に徹すほつほつ落椿
のど飴のニツキの香り凍戻る

中村克子

増山ちさ

佐々木輝美

*きらら句会 (上都賀支部)

下萌えや遊俳我に聚縁あり
天の妻のまなざし身近黄水仙
春浅し加齢の決意や内視鏡
この自由薔薇の芽ふくらみ日が暮れる
堅雪のふる里のこと饒舌に
露のとうさがして南下道の駅
三世代距離の取り方春の水
春夕べ帰る家あり一人旅
浅春の鍵穴に挿す月明かり
白梅の香を解き放つ明けの星
春の服自我面白き二歳かな
型紙の一辺に来る春日ざし

須藤火珠男

佐藤紀生子

篠原幸子

大河原晴子

北山眺亀

本間睦美

第59回現代俳句全国大会

集 募 品 作

投句締切は
8月1日
(必着)

◆応募規定◆

□投句料3句1組、2千円、何組でも可
ただし、新作未発表作品に限る。(3組9
句同時投句に限り、6千円を5千円にいた
します)

□投書不手、所定用紙使用、〒、住所、お
名前、電話番号、協会員・会員の別を明記
投句料は普通郵便、定額小為替無印名で、
現金書留必ず作品同時の封、又は郵便便
込郵便局の古い私取扱票をお使い下さい
加入者名、福岡県現代俳句協会、振替口座
番号・0177014149822、振
替払込受領書のコピーを投句用紙に必ず貼
付してください。

□送付先 〒807-0827 福岡県北九州市八幡西区
榎木2-16-12 現代俳句協会全国大会事
務局 福本 弘明宛 ☎093-6021
6058

□締切 8月1日必着
□撮影 協会の会誌「現代俳句」に優秀作
品を発表するほか、協会刊行物に採録
□賞 大会賞、後援団体賞、特別選考賞、秀
逸賞、佳作賞

□全国大会 令和4年11月12日(土)午後1時
より、J-IX九州ステーションホテル小倉
〒802-0001 福岡県北九州市小倉北区浅野1-1
111 ☎093-5411711

□記念講演 平出 隆 先生(詩人、多摩美術
大学 名誉教授)「蕪村を中心」に
関する 中村和弘(会長はじめ協賛幹部

□懇親会 午後5時より(会費6千円)

諸家近詠

掘り鉄のねらふ沿線風薫る

ステントに広がる余生夏旺ん

汗光る異国選手のタトウーかな

月天心我も地上の中心に

新藁のぼうじば四つ置かれおり

金木犀忘れ上手となりしかな

土くれに還れぬ塑像秋の風

楽園の入口はどご草の花

詠ふとは弔ふに似て櫨紅葉

落葉の森抜け期日前投票

汗に似て汚れちまつた水の星

ひかりの混色は白八月忌

月光下黒毛牛舎の影の黙

抱卵の鮎焼く頃かおらが村

ドローンの視座を怖れし青鷹

春の夜や夢の中まで人を恋ふ

春潮や陽は一筋に海照らす

誰一人傘持たずして春の雨

西塚とみ子

畠山 嘉子

齋藤 十明

水野 信一

春雨に煙の波の気振りかな
笑ふ山の中腹に在り終住処

龍 太一

春はあけぼの保線夫の背に茜
龍神のほひ腐草に螢火に
店頭に羽化の新刊みどりの夜
足早に秋医療者は木に草に
冬帝の眼光暮るる水にあり

◇現代俳句協会四十年永年会員として
梅田弘嗣さんが顕彰されました。
おめでとございます。

神 迎 梅田 弘嗣

目に見えぬ波動の舌は河豚の味
龍神のようなオーロラ翔ぶ聖地
手掴みの枯葉は生きてる音を出す
冬館妙にひかる黒曜石
マフラーは良いことづくめ靡かせり
後見人いづれば決める冬の虫
百歳の土台はゆっくり神迎
寅年の家康公に春を待つ

◇お知らせ

○和田 浩一

現代俳句三月号に「わたしの一句」が掲載
されました。

○水口 圭子

現代俳句三月号に「風土記篇」(38)栃木県歳
時記に見る風土と暮しくが掲載されました。

○寄付

畠山嘉子さん、龍太一さんより多大なご芳
志をいただきました。
ありがとうございます。

4月21日(木)小山市生涯学習センター
に於いて、令和4年度第1回役員会が
開かれました。

◆計報

武田美代さんが、令和四年三月三日
逝去されました。享年八七歳。
謹んでお悔やみ申し上げます。

※次号166号の原稿締切りは

9月5日です。